2017年09月10日 読売東京 朝刊 岩手 13版 33頁

「数独」初の試験 大槌で

仮設の99歳も挑戦

東日本大震災で被災した大槌町で9日、認知症予防に役立つとされる「数独（すうどく）」の認定試験が行われた。同町での高齢者を中心とした数独人気を受け、全国で初めて企画されたもので、県内外から集まった7～99歳の愛好家約110人が挑戦した。

数独は、縦横9列のマス目に同じ列や各ブロック（3×3）に1～9の数字を重複せずに入れるパズル。「SUDOKU」として世界中で親しまれている。

震災後、同町では高齢者の生涯学習支援をしているNPO法人ソーシャルハーツ（東京都）が2013年から教材に活用し、多くの町民が親しんでいる。月2回の無料学習教室は仮設住宅の集会所などで行われ、被災地の高齢者の健康長寿を支える取り組みとして、16、17年度の復興庁「心の復興」事業に採択された。

初開催された数独の認定試験に取り組む高齢者たち（9日午前、大槌町で）＝柿沼衣里撮影

日本数独協会（東京都）は同町での数独人気を知り、今春には初心者向けの問題集を発売。大槌町を認定試験の初の開催地に選んだ。

今回は初心者向けに問題を設定。40分間で4問を解き、正解数に応じて11～7級が認定される。会場で受験した約110人のうち7割が65歳以上の町民で、町外のみなし仮設で生活している住民らも参加した。

最高齢参加の大下キヨさん(99)は、同町吉里吉里の仮設住宅暮らし。試験前は「おらも出来るんだべか」と緊張気味だったが、試験が始まるとマス目にすらすらと数字を書き入れ、終了後は「ご苦労さんでした」と穏やかにほほ笑んだ。大下さんら約25人が通う高齢者サポートセンターでは毎日数独の問題を解いているといい、スタッフの芳賀美砂子さん(52)は「お茶を出しても手をつけないほど普段から自主的に取り組んでいる人ばかり。生きる力につながっている」と話す。

最年少参加の吉里吉里学園小学部1年の芳賀みくさん(7)は、母親の勧めで4歳の頃から自宅で数独を解き始めた。「学校では算数が一番得意。数独のおかげかも」とはにかんだ。千葉県流山市の大塚進さん(75)は、購入した電子辞書に収録されていた数独の問題をきっかけに熱中。初めて訪れた大槌町について、「『津波の被災地』のイメージしかなかったが、元気な同世代がいるとわかった。ご縁ができたので応援したい」と晴れやかな表情だった。

数独の名付け親で同協会代表の鍜治真起さん(65)は会場を訪れ、「『数字は（1から9の）独身に限る』を略して『数独』になったんですよ」と名前の由来を明かした。同法人・川上誠代表(63)は「試験の心地良い緊張感は脳の活性化につながる。町民のみなさんが数独の裾野を広げてくれた」と感謝していた。